

ピューリタンの娘——スザンナ・ウェスレー¹

梅津順一

I. はじめに

本日は、ウェスレー・メソジスト学会でお話する機会をいただき大変光栄に思っております。私はメソジスト研究の専門家ではありませんし、教会史、あるいはキリスト教学の研究者でもありません。私は国際基督教大学の教養学部社会科学科の出身で、在学中に、経済史の故大塚久雄教授のもとで学びました。そこでマックス・ヴェーバーの宗教社会学、とくに『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』²に関心をもち、東京大学大学院の経済学研究科に進学いたしました。私の最初の研究テーマは、ヴェーバーの視点からイギリス・ピューリタニズムの分析することでありまして、随分時間をかけて最初の著作『近代経済人の宗教的根源』³を纏めました。博士論文に手を加えて出来たものです。これは一面ではヴェーバー研究であり、一面ではピューリタニズム研究なのですが、ピューリタニズムを研究して経済学部で博士号を取得というのは、あま

¹ 本稿は、2010年9月13日、日本基督教団銀座教会にて開催された日本ウェスレー・メソジスト学会における講演をもとにしている。

² マックス・ヴェーバー、大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店、1989年。

³ 梅津順一『近代経済人の宗教的根源—ヴェーバー・バクスター・スミス』みすず書房、1989年。なお関連する文献として、同『ピューリタン牧師バクスター』教文館、2005年。同『ヴェーバーとピューリタニズム—神と富の間』新教出版社、2010年。

り例がないかも知れません。

この『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』ではメソジズムも取り上げられています。ヴェーバーの重要な概念に禁欲的プロテスタンティズムがありますが、そこにはカルヴィニズム、メソジズム、敬虔派、それにバプティスト系の諸派が含まれています。また、ヴェーバーは、論文の重要な個所でジョン・ウェスレーの文章を引用しておりまして、そのヴェーバーのウェスレー解釈の当否については、議論があるところでもあります⁴。ただし、私自身はこれまでメソジスト研究について本格的に取り組んだことはございません。したがって、今回のウェスレー学会での講演については躊躇するところもあったのですが、ピューリタニズム研究の立場からメソジストについてコメントするということでお話させていただきたいと思います。

表題の「ピューリタンの娘、スザンナ・ウェスレー」であります。ご承知の方も多いと存じますが、スザンナの父、サミュエル・アンズリーは、王政復古期にロンドンでピューリタン牧師として活躍した人物であります。実は、私自身がやや詳しく研究いたしましたピューリタン牧師リチャード・バクスターの友人でもあります。スザンナはウェスレー兄弟の母ですから、「メソジストの母」と呼ばれておりますが、その育ちからすれば、「ピューリタンの娘」であるわけです。としますと、スザンナ・ウェスレーを介して、ピューリタニズムとメソジズムの接点を見いたすことができることになります。私はスザンナの「メソジストの母」という側面についてお話する準備はありませんが、ピューリタニズムの側からスザンナの信仰の特徴を探ってみたいと思うわけであります。

II. ピューリタニズムとメソジズム——研究史から

今申し上げたような事情で、私はピューリタニズムを研究したと申しまして、教会史の分野はまったくの素人であります。本日は、教会史、キリスト教史がご専門の方々を前にして多少緊張しておりますが、教会史研究においてピューリタニズムは大変不遇ではないかと感じています。と申しますのは、教会

⁴ たとえば、岸田紀『ジョン・ウェズリ研究』ミネルヴァ書房、1977年。

史、あるいはキリスト教思想史の概説書を見ても、17世紀のピューリタニズムが積極的に取り上げられることは少ないように思うからです。プロテスタンティズム、宗教改革と申しますと、当然のことながら16世紀のルターやカルヴァンといった宗教改革者がクローズアップされております。ところが、続く17世紀のピューリタニズムはさりと触れられるだけで、すぐに18世紀の敬虔主義に移っていきます。いうまでもなく、メソジズムはこの敬虔主義の流れに位置づけられています。

ただし、それとは対照的に、ピューリタニズムは政治史、社会史、あるいは文学研究では積極的に取り上げられております。イギリスにおける17世紀半ばの王党派と議会派の内乱、これはイギリス革命とも呼ばれますが、このイギリス革命は宗教的対立でもありまして、ピューリタニズムは議会派の支持基盤として取り上げられますし、議会派に属して戦ったミルトン、バニアンは共にピューリタン文学を代表する人物です。あるいは、社会史的なイギリス史研究においては、社会階層と宗教の関係が注目され、とくに、貴族と貧民の中間にあった人々、ミドリング・ソート、中産層の宗教としてピューリタニズムが取り上げられています。あるいはピューリタニズムと「資本主義の精神」との関わり、あるいは近代科学の成立との関わりが議論されます。ピューリタニズムは教会史的には不遇なのですが、政治思想、文学、近代社会の成立との関係では比較的よく議論されているといえます⁵。

ごく大雑把に申しますと、17世紀のピューリタニズムと18世紀のメソジズムには、ある共通性を指摘することができます。ピューリタニズムもメソジズムも、イギリス国教会内部の下からの改革運動でした。自発的な運動体として出発しましたから、どちらも最初はあだ名で呼ばれ、それが正式名称のように定着しました。ピューリタンという言葉も、メソジストという言葉も、もともとは俗称で、しかもいい意味ではなかったらしい。ピューリタンとは、純粹とか潔癖とか、神経質なやつらといった意味ですし、メソジストも方法・方法とうるさい人々という意味ではなかったかと思います。それに二つのあだ名には共通な性格が示唆されています。宗教的な意識の高揚とともに、独自の宗教的

⁵ 最近のピューリタニズム研究の動向を知る上で、John Coffey and Paul C. H. Lim eds., *The Cambridge Companion to Puritanism*, Cambridge University Press, 2008.

実践、生活態度の特徴が語られているのです。ピューリタニズムが目指した「見える聖徒」Visible Saints、メソジストが課題とした「聖化」Holinessや「完成」Perfectionには、相似たものがあると考えられるのです。

したがって、ピューリタニズムとメソジストの関係を問う研究も少なくありません。たとえば、ロバート・モンクの『ジョン・ウェスレー—そのピューリタンの伝統』⁶がありますが、その第一部「ジョン・ウェスレーとピューリタン文献」では、ウェスレー自身がピューリタン文献によく親しんでいたことが指摘されています。しかも、ウェスレーは「キリスト教叢書」A Christian Libraryシリーズを企画して、数多くピューリタンの文献を刊行しています。このキリスト教叢書には、古代の著者や海外の著者も含まれ、国教会の著者も含まれていますから、ピューリタンだけを取り上げられているわけではありません。しかし、英国国教会所属の牧師よりもやや多い30名ほどのピューリタン牧師の著作が含まれております。この本でモンクは、第二部「キリスト者の生活の神学的基礎」、第三部「キリスト者の生活」で、それぞれ神学論、実践論をめぐってピューリタンとの関連を探っています。

最近第二版が刊行された、ジョン・A、ニュートンの『スザンナ・ウェスレーとメソジズムにおけるピューリタンの伝統』⁷も注目されます。この本は、父親でピューリタン牧師のサミュエル・アンズリーの肖像、ピューリタンの家庭で受けた宗教教育、結婚、さらに家庭人として、母親としての信仰と実践などを取り上げています。この主題に関する標準的な研究でありまして、私が特に付け加える目新しい情報はないのですが、ピューリタニズム研究の立場から若干この本を補う、そのような積りでお話することといたします。まず、ピューリタニズムの側の事情をお話し、スザンナの資料と照らし合わせて、メソジズムに受け継がれたピューリタンの伝統は何であるかを、より明確にできればと考えております。

これもご承知の方も多いと存じますが、最近スザンナの著作集がオクスフォード大学出版会から刊行されました。全体は三部構成になっておりまして、第

⁶ Robert C. Monk, *John Wesley: His Puritan Heritage*, Abington Press, 1966.

⁷ John A. Newton, *Susanna Wesley and the Puritan Tradition in Methodism*, 2nd edition, Epworth Press, 2002.

一部は書簡集、第二部は、ジャーナルすなわち日記、第三部は、教育、教理問答および論争の著述を収めています。生前スザンナが、これらの著作を公刊していたわけではありません。これらはほとんどが個人的な文書でありまして、以前にその一部が編集の上公刊されたことがありました。今回は、現存するスザンナの草稿を網羅的に集め、14通の書簡、いくつかの束の日記、それに書簡の形で表現された教育論、神学的試論などが集められています。以下ではとくに彼女の日記を通して、ピューリタンの実践との関わりを取り上げたいのですが、その前にピューリタニズムについてももう少しお話しておくことにしたいと存じます。

Ⅲ. ピューリタニズムの存在形態

さきほど、ピューリタニズムとメソジズムは似ていると申し上げましたが、決定的な違いは、ピューリタニズムは一つの教派ではなかったのに対して、メソジスト運動からは確固たる教派が誕生したことです。したがって、メソジスト運動は輪郭を描きやすいのに対して、ピューリタニズムはそれが難しい。しばしばアングリカン対ピューリタンといわれますが、どの時点でどのような対立軸を取るかで、ピューリタンの意味が微妙に変わってきます。革命前のイングランドで、国教会から分離を唱えた人々、これは分離派ピューリタンといわれますが、彼らのごく少数でした。ピューリタンの多くは体制内改革派であり国教会に帰属していました。英国国教会は中道を志向し、包括的であることを特徴としていますから、国教会との違いからピューリタニズムを描き出すのは難しいことになります。

ジョン・ウェスレーの「キリスト教叢書」*A Christian Library*に取り上げられたピューリタン牧師の多くは、17世紀半ば以降に活躍した人々でした。この場合、ピューリタンとは、1660年の王政復古後、再建された国教会の方針に信徒を拒んだ牧師たちを意味しています。その意味では、ピューリタンは非国教徒のことで、バクスターもそうでしたし、サミュエル・アンズリーもそうでした。ただし、この二人ともかつては国教会の聖職者であり、按手礼を受けています。では、王政復古以前に国教会に属しつつ、どのような牧師たちがピューリタン

と呼べるのか。ウェスレーはもう一つ前の世代の牧師のなかから、ジョン・ルートン、リチャード・シブズ、ジョン・プレストンを取り上げています。ウィリアム・ハラールは古典的研究『ピューリタニズムの勃興』⁸で、彼らを「霊的兄弟団」*Spiritual Brotherhood* として取り上げています。ハラールはケンブリッジのエマニュエル・カレッジのウィリアム・パーキンズの影響の下に、説教を重視し、信徒の日常的な実践を指導した一群の牧師たちを「霊的兄弟団」と呼んだのです。

ピューリタニズムが自発的な改革運動であったことは、ピューリタン牧師たちが「説教職」*Lectureship* によって支えられ、レックチャー、説教師として活躍したことによく示されています。説教職というのは、敬虔な人々の自発的な献金によって設定されたもので、熱心な信徒たちが基金を設定して、宗教性の豊かな牧師、魂を養う説教者を招いたのでした。たとえば、今申しましたパーキンズ自身がカレッジで教える傍ら、教区教会に設定された説教職に支えられて説教し、多くの人々を感化しました。都市によっては、都市当局が市場開催日に合わせて説教師を招いたといわれます。市場に人が集まるから説教を依頼したのではなく、逆に、説教を聞きに多くの人が集まることを予想し、市場を活性化したいと考えて、よい説教師を招いたのでした。

この説教職、説教師という地位は、公式的な教区教会の司祭とは微妙な関係にありました。教区司祭への不満が説教職の設定、あるいは説教師の招聘につながる場合もあったからです。事実、バクスターはウスターシャーの織物町キダーミンスターの牧会によって有名になったのですが、彼自身は正式の司祭ではなく説教師として就任しました。キダーミンスターの教区司祭は敬虔な信徒たちを満足させる説教を行うことはできなかった。そこで一部の信徒たちが教区司祭と交渉して、説教師を招くことになった。ちなみに、その条件は、司祭の受け取る収入の一部、三分の一ほどを説教師の謝儀に当てる、司祭は説教師の招聘とその説教内容には口出しすることはしないというものでした。そこでバクスターに白羽の矢が立ったというわけなのです。

したがってピューリタニズムは説教運動として特徴づけられますし、またそ

⁸ William Haller, *Rise of Puritanism*, Harper, 1957.

の説教によって、人々を回心させ新しい実践へと向かわせることになりました。ピューリタンの説教自体が信徒の魂を養うとともに、規律ある生活へと導くものでした。ピューリタン牧師の指導を受けて目覚めた聖徒たちが、罪の生活、肉的な衝動に振り回される生活から、清らかな生活へと踏み出し、「見える聖徒」の群れが生まれたのでした。ピューリタン牧師はまた「魂の医師」とも呼ばれました。牧師たちは信徒の日常生活に寄り添い、悩める心に霊の糧を与え、信徒が直面するさまざまな問題をつぶさに知り、その良心的な解決に取り組んだのです。

バクスターの牧師としての仕事は、主の日の礼拝説教、木曜の説教が中心であり、そのほかに木曜の晩の集会、土曜の集会など、信徒との小さな集会がありました。その集会では説教に関する信徒の理解を確かめ、信徒が日常直面する諸問題を一緒に考え、ともに祈り讃美を捧げました。また、個々の家庭への配慮にも積極的に取り組み、毎週二日を家庭面会日に当て、一家族一時間、一日七家族、一週間で十四家族との面会といったペースで行われました。これは町の周辺地域を担当する副牧師とあわせて、一年間でほとんどすべての家族に面会できることになりました。バクスターの牧会の成功は教会堂に会衆があふれることに現れ、また、町全体が主日は静粛に過ごし、通りを歩けば家庭で詩篇の歌が漏れ聞こえることとなりました。

確かに、バクスターの牧会の成功は顕著なものでありましたが、当時あって例外的なものではありません。バクスターは地域の牧師たちと協力して毎月会合をもち、ともに直面する諸問題について討論しました。ウスターシャー・アソシエーションと呼ばれる運動ですが、かりにウスターシャー教会連合と訳しておきますと、宗教的な敬虔を地域全体に行渡らせる運動が広がっていたわけですから。ちなみに、この牧師たちの会合のために準備されたものから『改革された牧師』*Reformed Pastor* という牧会上の名著が生まれました。しかも、こうした改革志向の教会連合は、方々の地域にも結成されました。いわば国教会を草の根から改革する運動が広がりつつあったわけですから。後にバクスターはこの時期が人生最良のときと記しています。ここに結集した牧師たちは、王政復古に際して、国教会に留まるもの、非国教徒の道を歩むものと二分されたといわれています。この意味で、バクスターが指導した市民革命期のピューリタニズ

ムは、非国教徒だけでなくアングリカン教会にも流れ込んでいったのです。

IV. サミュエル・アンズリーと「良心の諸問題」

スザンナの父アンズリーは、1620年生まれですから、バクスターの五才年下になります。彼の祖父はアイルランドの貴族であり、幼少の時に父を失い、母の影響で育ちました。母方の祖父は、ジョン・ホワイトというピューリタンを支持した法律家で下院議員でもあり、長期議会で下院宗務委員会の議長を務め、醜聞のある司祭の排除に活躍したことでも知られています。革命期には議会主導で教会改革にも乗り出していたのです。サミュエル・アンズリーは幼少期から聖職を志し、オクスフォードのクイーンズ・カレッジに入学しています。彼もまたピューリタン説教師として出発し、按手を受けて海軍のチャプレンとなり、その後ケント州のクリフ教区牧師に就任しています。彼はまた若くして下院で説教する機会にも恵まれました。彼は議会と対立したチャールズ一世には極めて批判的であったものの、その処刑には賛成ではなく、議会軍の指導者で後に護国卿となったクロムウェルを公然と批判したこともありました。その結果、クリフの教区牧師の地位を失い、ロンドンのごく小さな教会に移るようになりました。

1657年には、アンズリーはロンドンの聖パウロ大聖堂で主日の午後の説教者として指名され、オリバー・クロムウェルの子、リチャード・クロムウェルによって、比較的規模の大きい聖ジャイルズ・クリプルゲイト教区の牧師に任命されています。しかし、王政復古の時期に国教会への信従を拒み、教区教会を離れなければなりません。その後、彼は教区教会の外で会衆を導くことになります。国教会の立場は一国一教会、一地域一教会ですから、教区教会の外に教会の存在を認めていませんでした。非国教徒たちは教区教会を離れて牧師個人の住宅などでの細々と集会を持つことから始めて、すこしずつ国教会の外に教会を作り始めます。非国教徒には、集会禁止や都市からの退去命令など、さまざまな制限が加えられましたが、それでも次第に黙認されるようになり、後には寛容が与えられることになります。アンズリー牧師は1669年にロンドンのスピトルフィールズで、説教壇と座席を持つ新しい建物を建て、800人

ほどの会衆に向けて説教しました。1672年の寛容令では、長老派教師として認証を受け、その後も、何度か迫害に見舞われながら、1696年までそこで牧師の職にありました。スザンナが生まれたのが1669年の1月のことですから、スザンナは非国教徒の家庭に生まれ育った生粋の「ピューリタンの娘」なのですが、これもよく知られるように、1681年ごろ満13歳になるまえに、父の教会を離れ国教会に通うようになります。

先ほどの著作でジョン・ニュートンは、スザンナの改宗の背景に触れ、当時の国教会には、学識と説教に優れ、非国教徒に理解を示す穏健な指導者があらわれていたことを指摘しています。たとえば、後のヨークの大主教となったジョン・シャープは、彼自身ピューリタニズムから国教会に戻った人物ですが、当時ロンドンの非国教徒の間で人望のあったバクスターも、彼の教会の礼拝に出席していたことがあったようです。シャープの親友には、名誉革命後にカンタベリー大主教に就任するジョン・ティロットソンもおり、非国教徒には寛容政策を推進し、国教會的な枠組みの中でピューリタンの伝統を生かすことを呼びかけていました。今日から見れば、1662年は国教会と非国教徒の決定的な断絶の年と考えられますが、バクスターもそうですが、なんらかの形の再統合が実現することを願っていたピューリタンもいました。ですから、国教徒と非国教徒の違いは紙一重という側面もありましたし、非国教徒の間での教派間の激しい論争を嫌って、一つの教会を求めて国教会に戻った人々もいたのです。

サミュエル・アンズリー牧師は、『クリプルゲイトの朝の修練』⁹という説教集の編者としても知られています。これは彼がクリプルゲイトの教区牧師をしているころ、この教会で行われた朝の集会の連続説教を記録したものです。この朝の集会は、もともとは内乱期に、議会軍に従軍した兵士を送り出した留守家族が、祈りの会を始めたことから生まれました。内乱が収束した後は、多数の牧師が参加してCasuistical Lecture「良心問題の説教」が語られるようになりました。カズイストリーCasuistryには決疑論といういかめしい訳語がありますが、砕いていえばCases of Conscienceすなわち良心の諸問題、さまざまな事柄を良心的に解決するための指針を意味しています。バクスターが信徒の日常生

⁹ Samuel Annesley, ed., *The Morning Exercises at Cripplegate*, London, 1661.

活の諸問題に指針を与えたことはすでに述べましたが、そうした実践的な問題解決のための説教の記録がこの書物なわけです。

ピューリタニズムはパーキンズ・エイムズ・バクスターと続く、特徴的な良心問題解決集を刊行しており、その良心問題解決集はピューリタンの実践的性格をよく示しているところがあります。アンズリーのこの編著は、多数の牧師によって語られた同種の書物なのですが、ここで注目したいのは、この説教シリーズを担当した牧師の中には、非国教徒だけではなく国教会徒もいたことです。今述べたジョン・ティロットソンもその一人です。さきほど述べましたように、ウスターシャー教会連合に結集した牧師たちも、一部は非国教徒となり、一部は国教会に留まったのでした。そう考えますと、スザンナの改宗も、必ずしも父親の信仰からの離反でも、ピューリタンの伝統からの離反でもなかったこととなります。

バクスターには『キリスト教指針』というピューリタニズムを代表する「良心問題解決集」があります。マックス・ヴェーバーが「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」でとくに注目しているのはこの『キリスト教指針』¹⁰です。ヴェーバーはとくに経済生活についての指針、いわゆる天職義務の思想を検討しているのですが、私も大学院時代にこの本に取り組みました。全体は四部構成になっておりまして、第一部個人の義務、第二部、家庭の義務、第三部、教会の義務、第四部、国家ないし社会の義務と続き、人々が直面する諸問題が包括的に取り上げられております。しかも、さまざまな諸問題がきわめて具体的に取り上げられ、実際的な解決の指針も与えられております。

バクスターの数多い著作は、説教原稿を元にしていくものが多く、彼の一番読まれた著作である「回心をしていない人々への呼びかけ」とか、彼のもっとも有名な著作『永遠の聖徒の憩い』などは、説教原稿に加筆して出来上がりしました。他方では、牧会の現場をうかがわせる著作があります。この『キリスト教指針』はそのような著作で、信徒との間の現実の質疑応答から取られたと考えられる問答も数多く記されています。こうした実践指導書は、各人が自分の家に備えておいて、問題に直面したり、疑問を感じた折に、その都度参照して、

¹⁰ Richard Baxter, *A Christian Directory*, London, 1673.

生活の指針を得ることができるものでありました。こうした実践指導書の存在自身から当時の人々の生活形成、エートスを読み取ることができるわけです。

V. スザンナの信仰日記

1. 黙想の記録

最近刊行されたスザンナの著作集¹¹は、細かい字で組まれた500ページを超える大きな書物ですが、そのほぼ三分の一が信仰日記に当てられています。これはもちろん公刊を意識して書かれたものではありません。かつてその一部が紹介されたことがありましたが、今回はそれに加えて、三冊のノートと二つの断片をもとに編集されています。多くは日付がないのですが、内容から推察して、1709年、スザンナ40歳の頃から、1727年の間に書かれたものと推定されています。それ以前の信仰日記は残念ながら牧師館の火災のため失われてしまいました。著作集ではいくつかの章に分けて整理され、それぞれの章のタイトルとして、本文から引用した小文が置かれています。たとえば、ある章には、「よく考え、寡黙でいること」と記され、つづく章には、「あなたの言葉を適切に守ること」、「あなたが実際によく知っていることを書き記すこと」などと記されています。

それぞれの章に収録された日記の記事には、編者によって通し番号と見出しが付けられています。最初の章の記事には、「1、謙遜」、「2、譬え話：放蕩息子の要点」、「3、贖いについての思索」といった見出しが並んでいます。日記は分量としては、短くて三行、長いものでは二ページに渡るものがあります。後に触れますように、スザンナは一日、朝、昼、晩と三回黙想の時間を取りました。しかし、その日記から推測するかぎり、毎回記録が残されたとも思えません。毎日一日三度の内省の記録がぎっしりと詰まっているわけではありません。毎回メモをとったかも知れませんが、その中でも重要な記録が日記として残されたと考えられます。スザンナがこの黙想の時間をもつことの重要性について触れた部分がありますので、最初に紹介しておくことにしましょう。

¹¹ Charles Wallace Jr. ed., *Susanna Wesley: The Complete Writings*, Oxford University Press, 1997.

「聖霊が私たちのような罪ある価値のない被造物に、いつも助けを与えてくださるとは、なんと謙遜であられることでしょう。どんなときでも、聖霊を悲しませ、私たちから立ち去らせることのないように、十分に注意しなければなりません。神は言われました。「私の霊は人の中に永遠にとどまるべきではない。」創世記 6:3 どのようなときに私たちが意図して聖霊を拒むのか、・・・肉欲に強く固執して聖霊を私たちから離れさせ二度と戻らないことにならないように、気をつけなければなりません。聖霊が離れ去ってしまえば、最終的な背信となります。恵みによって私たちは立ちます。しかし、その恵みを軽んじ無視するとすれば、恐ろしいことに審判と炎の憤激を予期するほかなくなります。

とくにあなたの心を、神に敵対するものから純化するように注意しなさい。こころを平静に整え、出来るかぎりこの世から離れなさい。細い声は騒々しい感情の雷鳴とか騒音のなかでは、聞こえてこないのです。

こころを反省できるように整えなさい。一日のなかでしばしば、禁じられた道に踏み込んでいかにないように、こころを呼び起こすようにしなさい。すくなくとも一日三度、良心の審査 *an examination of your conscience* を行いなさい。この世の事柄から退隠する時を失わないようにしなさい。」¹²

スザンナはこのような黙想に支えられて、牧師の妻として家事と育児に忙しい日々を過ごしたのです。ジョン・ニュートンは、こうしたスザンナの信仰生活は、アヴィラの聖テレジアにたとえられるといいます。聖テレジアは「強い性格と鋭敏さと大きな実践的能力をもつ女性」であり、「彼女が神秘的経験と、改革者、組織者としての休みなない活動力を併せ持っていた」からです。テレジアの修道院の内部での「黙想」*contemplation* と「活動」*action* を、スザンナは家庭生活の中で行ったわけです。こうした黙想の記録、信仰日記は、模範的なピューリタンに見られるものでした。ピューリタンの信仰日記は、神との対話の記録でもあり、また、自己の行動の点検の記録であり、永遠の命へと導かれる生涯の記録となるものでした。

¹² *The Complete Writings*, p. 217.

2. 自己審査 (Self-Examination) の意味

バクスターは、『キリスト教指針』のなかで、信仰的黙想を「自己審査」「自己判断」として捉え、その意味を次のように説明しています。

「一言でいえば、それなしには、私たちは自分自身を知ることがないからです。私たちは根拠のある安らぎ、真実の悔悛と謙遜を持つことができず、キリストとその恩恵を正しく評価することもできません。・・・われわれの義務を正しく捉えることもできないのです。自分自身を知らないものは、神を知らず、事柄を正しく知ることができず、正しく行うこともできません。」¹³

信仰者として正しい道にいるのかどうかは、日々自己を振り返りながら生活しなければならぬというわけです。それは自己観察であり、自己の弱点の意識であり、神とともに歩むことの確認でした。

「あなたの心と生活とを注意深く観察することを、たえず行いなさい。あなた自身について、不注意になったり、無視したりしてはなりません。」

「あなたの生来の気質や傾向をよく知り、あなたがとくに陥りがちな罪がないか警戒しなさい。それについてはもっとも厳しく観察しなさい。」

「あなたの地位や職業、親族関係や仲間によって、あなたが陥りがちな誘惑は何かを理解しなさい。その点では、あなた自身を最大限警戒しなさい。」

「信仰と感謝の実践を新たにし、これから後はよりよい従順に向かう決心することを、すべての目的としなさい。あなたが救い主の必要と助けをもっと理解できるようにし、罪が増し加わるところで増し加わる恩恵を讃美するようになさい。来るべき時のために、より注意深くかつ神聖に歩むことができるようになりなさい。」¹⁴

すでに見たようにスザンナの場合は、一日一度ではなく、三度、朝と昼と夜に自分を見つめることを自分に課しています。

¹³ *A Christian Directory*, p. 901.

¹⁴ *A Christian Directory*, p. 902.

「偉大なる神に直接近づく前に、少なくとも 15 分間は反省し思考を整える時間に当てなさい。地上の王とか、高貴な人々があなたのところに訪ねてくるとすれば、・・・服装とかすべてに品格よくするように注意を払うでしょう。あなたが、宇宙の主権者たる主に話しかける名誉をもつとすれば、いっそうあなたの心を整えるために配慮すべきではないでしょうか。あなたの成功は、あなたが主に語りかけるときの魂の状態にかかっているのです。・・・主はこころのこもらない犠牲を喜びません。・・・軽率に大慌てに祈ったり、仕事や楽しみのために突然祈りを中断することは、聖なる神を戸惑わせるもので、神は耐え難く思い、必ずや処罰されるでしょう。」¹⁵

「日々三度の審査をより正確に行いなさい。取るに足らない事柄があなたをかき乱すことのないようにしなさい。長時間必要とするわけではありません。一度失われた機会は、決して戻ってきません。・・・

機会が与えられているときには、感謝をもって力強く有効に活用しなさい。神はすべてのことに対して、あなたを裁かれることを留意しなさい。怠慢はもっとも危険です。・・・あなたはあなたができる良いことを、とくに神があなたに委ねた魂たち（子ども）たちのためによいことをしなければなりません。あなたの子どもたちや雇い人たちのなかで、一人でもあなたの模範や教育が不足することで滅びることにもなったら、あなた自身が永遠の滅びの危険にあることとなります。」¹⁶

では、何を審査するかといえば、自分自身の生き方を偏りなくみつめ、神との関係を正しいものとするのでした。

「審査では、三点について注意しなさい。第一に、よい考え、言葉、行動を賛嘆し、それらが自分自身の力や能力の結果生じたかのように思い、自分自身のものであるかのようにしてはなりません。ただ、神にその恵みの栄光を帰し

¹⁵ *The Complete Writings.*, p. 217.

¹⁶ *The Complete Writings.*, p. 221.

なさい。

第二に、神の聖霊の働きに対し、神を讃美することを怠ってはなりません。

第三に、決して、イエス・キリストを忘れてしまわないようにしなさい。いつも、キリストの故に、キリストの計らいから、いつも聖霊の働きと、その他の、霊的な、あるいは一時の祝福を受けていることを認識しなさい。」¹⁷

自己中心の罪の生活ではなく、神の眼差しの下に生きること、それは日々の自己審査、自己確認によって実現すると考えられたのです。

3. 自己統御 Self-Government

こうした「自己審査」によって作り上げられる生活は、「統御」という言葉で特徴づけられるものでした。衝動に流されないで、信仰的な視点から自分のあらゆる行動を秩序づけることが「統御」にほかなりません。バクスターは『キリスト教指針』で、信徒の活動と生活のあり方を、「思考の統御」「感覚の統御」「感情の統御」「言葉の統御」「身体の統御」として指針していますが、スザンナの次のような記録は、バクスターでいえば「言葉の統御」に相当するものでした。

「あなたの言葉遣いを適切に監視し、習慣として、どんな場合にも、真実なこと以外は何も語ることをないようにしなさい。意図して、あるいは不注意から、間違ったことを話すのは、真実なる神に対する大きな罪です。説明するにせよ、過去の行為について語るにせよ、よく考えて冷静に話すように注意しなさい。度を越えて浮かれたり笑ったりして、あるいは、冷酷になったり怒り狂ったりして、記憶が不確かなところを勝手に創作したりしないようにしなさい。あなたが偉大で神聖な神の御前にいることを、いつも覚えているようにしなさい。すべての罪は、神の属性と一致せず、違反するものです。嘘つきは、神の真実とは反対で罪です。」¹⁸

¹⁷ *The Complete Writings*, p. 271.

¹⁸ *The Complete Writings*, p. 215.

言葉遣いとともに、感情に振り回されないことも大切でした。スザンナはとくに怒りの感情についてこう記しています。

「怒りの最初の動きは、普通は不意に現れ、いつも激しいので、大部分の人は、その感情に襲われて、・・・不適切な言葉や態度をとってしまいます。

ですから、そうなりそうなときには、前もって<今は、怒ることはしません>と決心しておくことが望ましい。この方法で、怒りのほとぼしりを抑制することができ、その感情は緩和され、動揺を引き起こすことにはなりません。

しかし、突然激情が沸き起こりあなたの心に強い衝撃を与え、あなたの信仰も理性も働く余裕がなく、あなたの助けにならないのであれば、最初の感情のうねりが引いていくまでは、良かれ足かれ、一言も話さないと決心しておくこと。それから、怒りを招いた事柄が何であるかを、偏見や激情なしに適切に検討するまでは、決して怒らないと決心しなさい。怒りの原因をその状況の中で観察しなさい。なぜなら、侵害の本当の性質を知るまでは、どの程度の怒りが合法的で適当かを語ることはできないからです。

真実はこうです。この感情は、この世の事柄に対して清い思いで無関心になり、いつも注意深くまた注視することなしには、決して抑制できません。怒りの感情やそのほかの感情が・・・動揺を引き起こすことがあります。私たちがそれから自由になりたいのであれば、私たちは絶対にこの世の力の外にいるように努めなければならないのです。私たちは富や快楽や名誉を過度に愛してはなりません。」¹⁹

ここには、単に統御とは何かというだけではなく、どのように統御できるかが真剣に検討されていることが注目されます。怒りの感情に翻弄されてはならないと知っているだけでは十分ではなく、実際に怒りの感情に振り回されないことが重要であるわけです。そうした自己訓練の中から、新しい性格がうまれることとなります。そうした聖なる性格の持ち主がピューリタンと呼ばれ、またメソジストと呼ばれたのでした。

¹⁹ *The Complete Writings*, p. 247.

4. 家庭教育

スザンナの日常的な仕事は牧師の妻として、家事に育児に尽力することですが、信仰日記には、子どもの教育のことがよく記されています。実は、ピューリタニズムにとっても「家庭の統御」は重要な課題でした。バクスターの『キリスト教指針』も家庭の義務を積極的に取り上げ、親子の関係のあり方、また家庭における信仰教育についても、具体的な指針を与えています。したがって、スザンナの家庭教育の方針とバクスターの指針には、共通するものが多く含まれています。いくつかの具体的な問題について、平行する内容を紹介してみることになります。最初にスザンナの日記、次にバクスターの指針を記します。

親が模範となること

『教えながら、私は学ぶ』、『他者に説教しながら、私は私自身を教える』。それに、『自分の生活で教え、行動で言葉を証明する人々は、最高の教育者である』。そうしなさい、そうすれば神はあなたの努力に祝福を与えるでしょう。子どもたちに宗教の初歩を教えながら、注意深くその意味をあなた自身のところに刻むようにしなさい。それにあなた自身の感情に注意し、子どもたちが、あなたが宗教の偉大な真理に確信をもっていることに、ついて来て、受け入れることができるようにしなさい。あらゆる知識を持っているとしても、聖なる愛を持たないならば、何の益にもなりません。

あなたの気品を保ちなさい。あなた自身を敬いなさい。神があなたに与えた理性に相応しくないものは何も行ってはなりません。』²⁰

「指針18 あなた自身が模範となって、子どもたちに神聖さ、天国、言葉と生活にとがめられるところがないことを教えるようにしなさい。・・・両親の模範は子どもたちにとってもっとも強く影響を与えます。子どもたちが、あなたが神を恐れて生きているのを知れば、それこそがもっとも必要で素晴らしい人生の生き方であることを納得し、彼ら自身がそうすることでしょ。」²¹

²⁰ *The Complete Writings*, p. 236.

²¹ *A Christian Directory*, p. 453.

叱り方

「あなたの感情を満足させるために、子どもたちを叱ってはなりません。叱るときには、義務の意識から行い、子どもたちを間違いから救い出し、あなたの権威を守るようにしなさい。とくに、過失にふさわしくどの程度叱るべきかを十分注意しなさい。子どもたちは理性が弱く、判断が未熟であることを考慮に入れなさい。しかし、神に逆らって罪を犯すときには、愚かな愛情から容赦したりしてはなりません。」²²

「指針17 必要な叱責は次のように慎重に行いなさい。・・・感情に駆られて叱ってはなりません。子どもたちがあなたは冷静であることを感じ取るまでは、叱らないようにしなさい。そうでなければ子どもたちは、あなたが理性からではなく、怒りの感情でそうしていると考えてでしょう。」²³

教える方法

「子どもたちに教えたり、書いて教えたりする上で、ある種の方法を遵守することが必要です。道徳的戒律の要約である十戒について、簡潔な説明を一通り行いなさい。次に、簡潔に啓示宗教の原理を説明しなさい。この説明は二番目にすべき語り掛けです。文章を書いて、神の存在と属性について、短く語ることを付加しなさい。」²⁴

「指針9 子どもたちに宗教の教理を教えるときには、キリスト教の本質的なものの要約として、洗礼による契約から始めなさい。・・・指針10 (その後で)、子どもたちには信条、主の祈り、十戒を学ばせるようにしなさい。・・・指針11 次に小教理問答を教え・・・それから大教理問答に進みなさい。」²⁵

²² *The Complete Writings*, p. 237.

²³ *A Christian Directory*, p. 453.

²⁴ *The Complete Writings*, p. 236.

²⁵ *A Christian Directory*, p. 480.

時間の使い方について

「断固とした決心で、あなたに定められた規則を守るようにしなさい。・・・規則を守ることが、家族のなかで秩序を維持するのです。友達とか仕事とか取るに足りない出来事によって、定められた時間に行く、子どもの読書、仕事、詩篇の讚美がなされなかったり、妨げられたりすると、そうした妨げが増し加わり、ついにはどんな秩序も献身の想いも失われることになるでしょう。」²⁶

「指針 8 時間を特に尊重し、金銀を失うことがないように配慮すると同じく、毎日一時も時間を無駄に失うことがないように注意しなさい。虚しい遊び、着衣、宴会、無駄ばなし、無益な友人や惰眠、これらがすべてあなたから時間を奪う誘惑となるとすれば、それだけ緊張感を持って注意を怠らず、固い決心で立ち向かいなさい。」²⁷

家庭礼拝

「わが魂よ、神を讚美せよ。・・・

感謝をもってこの日受けた憐れみを知りなさい。家庭礼拝での聖霊の働き、神を語り、子どもを教え、家庭の義務を行う心と能力、あなたと家族が健康で、事件や恐怖や危険から守られていること。確かに、私たちの讚美の言葉は、不可欠の喜ばしい義務です。心から神があなたをひどい罪から守られた全能の力に感謝し、あなたの不足を補うイエス・キリストに信頼し頼りなさい。」²⁸

「指針 6 家庭礼拝を一日二回、いつも、ときを考えて、邪魔が入らないような時間に行いなさい。正当な理由なく遅らせてはなりません。・・・最初は神の御名を呼び求めることから始め、神の助けとキリストの祝福を求めなさい。次に聖書の箇所を順序良く読み、それが理解でき、応用できるように助け、それができないのなら、その目的でなんらかの有益な書物を読みなさい。詩篇を歌

²⁶ *The Complete Writings*, p. 271.

²⁷ *A Christian Directory*, p. 468.

²⁸ *The Complete Writings*, p. 272.

い、祈りにおいてあなたの魂を熱心に注ぎ出さない。」²⁹

このように見ると、バクスターの家庭生活の指針がスザンナに受け継がれていることは、説明の必要はないでしょう。バクスターの指針は彼の独創というよりも、当時のピューリタニズムに一般にみられたものであり、サムエル・アンズリーも共有していたものでした。スザンナはこのような教育を受けて「ピューリタンの娘」として育ち、同じように子どもたちを教育し「メソジストの母」となったのでした。

VI. まとめ

以上、スザンナ・ウェスレーが「ピューリタンの娘」であることをお話してきました。私なりのピューリタニズム研究を踏まえて、スザンナの信仰生活にピューリタンの特徴を探ってみました。最後に、ヴェーバー研究の立場から、蛇足を記してお話を終えたいと存じます。ヴェーバーが「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」で注目したのは天職義務の思想であり、プロテスタンティズムのなかに職業を召命として受け取る実践が見られたことでした。ヴェーバーがその典型例としてみたのがピューリタニズムであり、その代表例がバクスターの経済生活への指針であったことは既に触れました。バクスターは天職義務の思想、「プロテスタンティズムの倫理」の表現者として位置づけられています。

ところで、ヴェーバーが「資本主義の精神」の典型例としてあげたのがベンジャミン・フランクリンでした。フランクリンにも天職義務の思想がありますが、宗教的信仰との関係は希薄になっています。フランクリンの有名な十三徳の樹立、十三徳を身につけた人間は、救いの問題、「恩恵の身分」というよりも、「人間的な完成」として意識されています。フランクリンにおいては天職義務のなかで、召命が次第に薄らぎ、職業のウェイトが増していったといってもよいかも知れません。ヴェーバーが、バクスターとこのフランクリンの中間にあると見ているのがダニエル・デフォーです。デフォーはロンドンのアンズリー

²⁹ A *Christian Directory*, p. 467.

の教会に出席していた非国教徒であります。彼が描くロビンソン・クルーソーは、「同時に伝道もする経済人」と特徴付けられています。

世代的に言いますと、バクスター(1615-1691)と父アンズリー(1620-1696)は同世代、デフォー(1660-1731)とスザンナ(1669-1742)が同世代、フランクリン(1706-1790)と同世代なのがジョン・ウェスレー(1703-1791)ということになります。としますと、ピューリタニズムの天職義務の思想から、職業に傾斜したのがフランクリンであるとし、召命に傾斜したのがウェスレーといってもよいかも知れません。では、フランクリンとウェスレーはまったく別の世界の住人になってしまったのかといえそうでもありません。

フランクリンは自伝の中で、ウェスレーの盟友ジョージ・ホイットフィールドとの関係について触れています。英領植民地アメリカを巡回したホイットフィールドはリヴァイヴァルを巻き起こしましたが、理性的なフランクリンと敬虔なホイットフィールドは親しい友人でした。フランクリンはことさらに信仰の友ではなく世俗的な友人であったと記しています。出版も手がけていたフランクリンは、よく売れたホイットフィールドの著作も刊行していましたから実利的な関係もあったかも知れません。しかし、あるときホイットフィールドの集会に出かけたフランクリンは、その説教に感動のあまりお財布の有り金をはたいてしまったとも記しています。その献金は孤児院のために用いられました。³⁰

かつては職業と召命は一体であった。それが別々に分離して保持されるようになるが、しかし、別々のところにある職業と召命が協力しあうことにより、有益なことが実現するのではないか。プロテスタント文化の支配するアメリカ社会ではよく見られることですが、このフランクリンとホイットフィールドのエピソードもそのことを示唆しているように思います。経済学部の大学院で学んだ私がピューリタニズムに関心をもつのもそのような理由があるからなのです。ここには聖職者と俗人、教会と世俗社会、信仰生活と社会事業の望ましい関係が示唆されていると考えられます。蛇足ではありますが、最後に、ピューリタニズム研究、メソジズム研究がもつ、教会を超えた社会的な意義に一言触

³⁰ フランクリン、松本慎一他訳『フランクリン自伝』岩波書店、1957年、170ページ以下。

れて、本日の私の話を終わりにしたいと思います。

(青山学院大学・総合文化政策学部教授)